

国際海藻シンポジウムに参加して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八谷, 光介 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006330

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



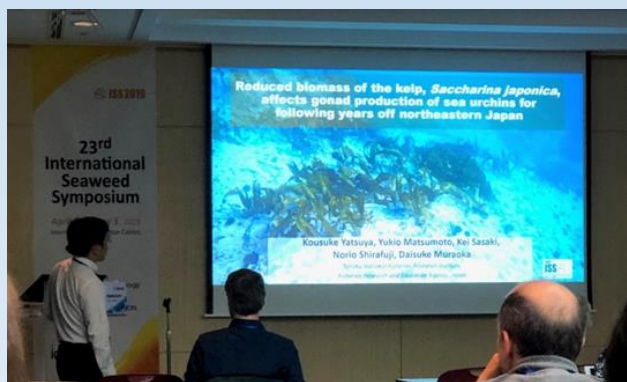
国際海藻シンポジウムに参加して

浅海生態系グループ 八谷光介

《シンポジウムについて》

韓国済州島で4月28日から5月3日に開催された第23回国際海藻シンポジウムでは、世界各地から約700名（日本は約30名）が集まり、海藻の利用、生態、養殖など様々な発表がありました。

私は、三陸海域の岩礁生態系を支えるマコンブの豊凶が、接岸してくる親潮の強弱により年々変動し、2016年以降のように親潮の弱い年が続くとマコンブの不作が長期化し、ウニの身入りが年々悪くなることを紹介しました（下の写真）。聴衆にとっては、三陸の独特の海洋環境とそれに合ったマコンブやキタムラサキウニの生態に興味を持ってもらえたと思います。



注目していた話題としては、温暖化や海洋酸性化の海藻類への影響や将来予測、世界各地からの藻場衰退現象などでした。藻場を構成する大型褐藻類は、冷たく栄養塩の豊富な環境を好むので、温暖化により分布域は極方面へ移動すると予測されています。オーストラリア南岸には大規模なカジメ属の藻場があるのですが、これよりも極方面には浅海域がないので、いずれ消滅するのではないかと懸念されていました。また、海藻類を食べる魚類やその捕食者の分布域の移動も、海藻類と比較しながら注意深くモニタリングする必要性が述べられていました。

私の研究海域である三陸沿岸でも、気候変動の影響により、冷たく高栄養塩の親潮系水の流入が減少すれば、豊かなコンブ場が衰退し東北の漁業に大きなダメージを与える可能性があります。そのため引き続き沿岸生態系の調査や観測を継続することの重要性を再認識しました。

韓国でも磯焼けが問題となっていました、そ

の対策はかつて日本で流行った人工漁礁の投入が多かったです。

磯焼けやその対策の経過は日本と似ているので、今後も情報交換を進める必要があるように感じました。

海藻は陸上植物と同様に温室効果ガス（二酸化炭素）の吸収源としても重要です。そのため、海藻養殖は食料供給以外にも温暖化対策としても注目され、コンブ類を中心に北米東岸などでも取り組まれていました。今後は、人為的な二酸化炭素排出量を吸収するのに有効な養殖規模やコストを検証することが課題となっています。

学会の公用語である英語には、自分を含めて日本人が一番苦労していました。「英語ができないと困る」ことが他国に比べて少ない現状を表しているようです。国際学会での発表は、英語で困る「貴重」な機会ですから、今後ともポスター発表よりハードルの高い口頭発表に挑戦していきたいと思いました。

《韓国のこと》

やはり海外では、現地語が分かれば、それだけ楽しい経験が得られると思います。私もこれまで知らなかったのですが、ハングルは最も日本語と似ている外国語なので親近感がありました。



済州島は九州の五島列島から200kmほどにあり、主要な魚介類も、私の前任地の長崎とほぼ同様でした（上の写真は、店の看板の一部）。以前、長崎から巻網船が済州島の近くまで行くと聞いていたので、改めてこれらの近さを感じました。

何かと身近な韓国ですが、その人々や研究者と付き合うためには、専門分野だけでなく、その背景も知る必要があると、私は思います。学会のエキスカージョンで、バスの移動中にガイドさんが、韓国や済州島の自然、歴史、文化などを紹介してくれたことは良い機会でした。

東北水産研究レター No.43

発行月：令和2年1月発行

編集・発行：国立研究開発法人水産研究・教育機構

東北水産研究所

〒985-0001 宮城県塩釜市新浜町3-27-5

TEL：022-365-1191 FAX：022-367-1250

URL：<http://tnfri.fra.affrc.go.jp/>